

「中間雑誌」が語る戦後日本社会

——『小説新潮』創刊号 1947～1965年のグラビアを中心に——

Historical Narrative of Postwar Japanese Society by “Middlebrow
Literature Magazines”

—— Focusing on the Gravures of *Shōsetsu Shinchō*
from 1947 to 1965 ——

岩元省子

Shoko IWAMOTO

(人間社会研究科 現代社会論専攻博士課程後期)

要約

本稿は、戦後日本社会において多くの国民が愛読した「中間雑誌」『小説新潮』（新潮社）をひも解く、新たな「戦後史」構築の試みである。中間小説が戦後の読物であり、大衆を主体に創刊され現在でも刊行され続けている事実をふまえ、戦後日本社会をグラビアから検証し、創刊号 1947 年 9 月から 1965 年の 12 月までを対象期間にすえ分析するものである。まずは、戦後日本社会における出版ブームのさなか、「中間雑誌」が位置する空間をふまえ、『小説新潮』におけるグラビアから叙述できる戦後日本社会の時期区分を試みる。それらは第Ⅰ期～Ⅳ期に分かれるが、通史では語り切れない大衆の「欲望」を、その象徴的存在であった『小説新潮』から浮き彫りにするものである。これまで「中間雑誌」が研究対象史料として扱われたことがないことをふまえると新たな戦後史の叙述となるものである。

[Abstract]

This paper is an analysis of Japanese postwar society “middlebrow literature magazines” which are placed somewhere between serious literature (jun-bungaku) and popular fiction (taishū-shosetsu), *Shōsetsu-Shinchō* (Sinchosha Publication Co.,Ltd.) from the first publication in 1947 to 1965. In postwar Japan, many among the Japanese masses enjoyed *Shōsetsu-Shinchō*, and it had been entertaining their impoverished minds following Japan’s defeat in Asia-Pacific War. This paper targets and provides narratives on *Shōsetsu-Shinchō* from 1947 up until 1965, and divides its history into four periods of postwar Japanese society by its gravures. This paper will provide a new historical narrative of postwar Japanese society through the analysis of middlebrow literature magazines because there has been little discourse and study utilizing *Shōsetsu-Shinchō*.

はじめに

本稿は、戦後日本社会において多くの国民が愛読した「中間雑誌」『小説新潮』（新潮社）をひ

も解く新たな「戦後史」構築の試みである。『小説新潮』の主に巻頭ページに掲載されるグラビアを中心に、分析対象期間を創刊号（1947年）から1965年までとし分析するものである。「中間雑誌」は戦前から存在した雑誌ではあるが¹、戦後においてその地位は、出版界、日本文学史において確立したとされる。戦後日本社会の言説空間では「中間」なる言葉が登場するようになった。例えば加藤秀俊は「中間文化論」『中間文化』（平凡社、1957年）²のなかで戦後の「文化」を三段階に分け、「中間文化」を第三期（1954年～）に歴史的に位置づけその第一の理由に「新書ブーム」を掲げている。そして中村光夫は、「中間小説論」³のなかで中間小説という言葉がつかいだされたのは昭和二十三年ごろと指摘し、続けて「それは浮動的で、意味の輪郭がはっきりしない代わりに、生きた時代性（傍点筆者）を持ち、戦後日本の文壇史上にあらわれた特異な小説形態で外国に原語を持たない、我国独特な言葉で…（後略）」と日本文学にあらわれた特異な小説形態であると中間小説を定義している。加藤、中村のこの発言は、ともに1950年代後半であるが、「中間」と名のつく文化、小説を題材に戦後日本社会の空間を分析するものである。

1960年代以降「中間雑誌」の種類は増え、現在『小説新潮』は、「中間雑誌」の御三家と呼ばれるまでにその位置をゆるぎないものとしている⁴。本論文においては「中間雑誌」に焦点を絞り、その代表的存在である『小説新潮』が戦後日本社会において多くの大衆に支持され売り上げをのばしていった実績に基づき歴史史料として分析する。

「中間雑誌」には中間小説とよばれる小説形態が主に掲載される雑誌である。日本文学史における中間小説の定義は、純文学作家による大衆向けに書かれた小説というものが一説に存在するが、本論文では先ほどの中村による定義とそれらをふまえ、戦後大衆の娯楽としてそして、戦争経験によって抑圧され続けてきた大衆の「欲望」のはけ口として当時最もよく読まれた「中間雑誌」の代表的存在である『小説新潮』に戦後日本社会の時代性をみだし省察する。本論文では、戦後の読物の「中間雑誌」『小説新潮』がなぜこれほどまでに大衆に支持され、出版社、作家たちはその期待にどのように応えていったのであろうか、まずは巻頭ページを飾るグラビアの歴史的変遷に着目し戦後日本社会の時期区分の考察を試みる。因みに、月刊雑誌という枠組みで捉えた場合、『小説新潮』よりも売り上げが上位だったものに『文藝春秋』（文藝春秋社）がある。しかし本研究は、「中間雑誌」『小説新潮』がこれまで歴史的に研究対象史料として扱われていないこと、中間小説が戦後に急成長した事実と、大衆の「欲望」の象徴であることに問題意識を持ち分析をするものである。よって本研究は新しい戦後日本史の一面を提示できるものであると考える。

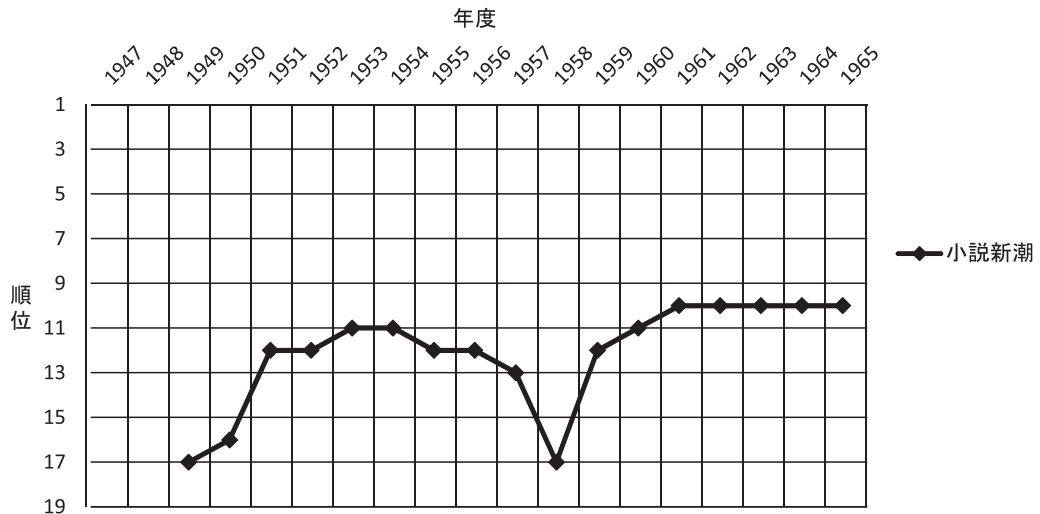
I 「中間雑誌」『小説新潮』の概観

（1）創刊当時の出版状況

『小説新潮』は敗戦二年後の1947年9月に新潮社から創刊された。前年の1946年までは「出せば何でも売れる」時期で『日本出版年鑑』（協同出版社）によると「五月を中心としたインフレの急ピッチは、読者階級の購買力を減退せしめ、新聞紙上では『返品 mountain』と称する出版界の不安時代を招来した。しかしこの不振時期も九月以降には、良書主義となり発行所は建部数を

減少して返品危険の限度を発行点数によってカバーするようになった。(後略)」と記されている⁵。良書主義が興った背景には、この年から毎日新聞社主催の毎日出版文化賞が設定され優秀な出版物を対象とした文学・文化全般にたいして賞が贈られることになったことがきっかけである。『日配時代史』(日本出版ニュース社)には、この年の雑誌は、一月期平均五円三十銭だったものが、その半年後六月期には十八円二十銭となり約三・五倍の値段の上昇を示しているとする⁶。このように『小説新潮』創刊当時の出版事情は厳しいものであったが、日本が敗戦から復興し1960年代には高度経済成長を成し遂げた道のりと同様、同雑誌はその後、常に月刊雑誌として上位に位置する発行部数を記録することとなる。創刊当時国内において発売された雑誌のアイテム数は2545点⁷、1965年では2172点⁸であり、当時最も読まれた月刊雑誌として分析範囲の時期では平均10位に位置していた⁹。このことから『小説新潮』が戦後日本社会のなかで多くの国民が愛読していた雑誌である事がわかる。

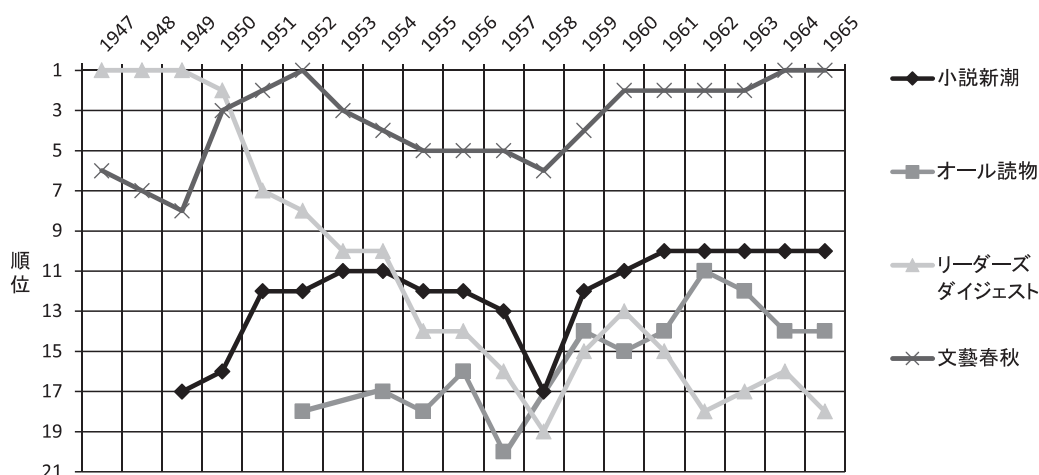
表 I - 1 「いつも読む月刊雑誌・年度別」 『小説新潮』



出典：毎日新聞社 『読書世論調査 30年 戦後日本人の心の軌跡』 毎日新聞社、1977年、88頁をもとに作成

現在でも発行されている「中間雑誌」の分類に属するものに『オール讀物』(文芸春秋社、1931年創刊、1946年2月復刊)、『小説現代』(講談社、1963年創刊)、『小説宝石』(光文社、1968年創刊)、『小説すばる』(集英社、1987年創刊)などがあるが、戦後の読者世論調査をとり行った毎日新聞社によると、1947年から30年間でもっとも読まれた月刊雑誌に、『小説新潮』が9位、『オール讀物』が15位に入っている¹⁰。

表 I-2 「いつも読む月刊雑誌・年度別」



出典：毎日新聞社『読書世論調査 30年 戦後日本人の心の軌跡』毎日新聞社、1977年、255～259頁をもとに作成

(2) 啓蒙的「創刊の言葉」

『小説新潮』創刊1947年度の9月～12月号の4回にわたり巻頭ページに「創刊の言葉」を当時の編集長佐藤俊夫はこのように記している。

「創刊の言葉」

「今日ほど小説の盛んな時代はなく、また今日ほど小説の貧困を嘆かれている時代はない。(中略) 本誌の念願とするところは、小説文学を今日の水準より一層高め、その領土を広く開拓して、通俗に墮せず、高踏に流れず、娯楽としての小説に新生面を開くと共に、近代小説の使命たる人生の教師としての役割をまた十分に果さんとする点にある。その執筆陣は鬱然たる大家より新進無名の作家にまで及び、小社の伝統と熱情を傾け、…(後略)。(47・9：表紙裏)

尾崎秀樹の言葉で表現するならば、「芸術性を失わずに大衆性を持った小説の創造という意図」¹¹と表現している「創刊の言葉」である。これにさらに説明を加えると、これまでの文壇における純文学と大衆小説の定義を覆し、「新しい小説」として中間小説を「娯楽」の対象として大衆に提供する約束をしていると解釈できる。戦後における「中間小説」というジャンルの新しい位置づけの啓蒙的「創刊の言葉」である。このように編集長から読者へ届ける「言葉」は、翌月の10月号から12月号まで計4回にわたり掲載された。その「言葉」はどれも目次が掲載される頁上の上半分に掲載される。創刊号においては、表紙の裏側(当時の用紙配給の制限も加味されているとはいえ)読者にとって真っ先に目にする誌面体裁における「柱」とされる位置に印刷されている。

10月号では、民主主義の時代は大衆の時代であり、文学も大衆を主体にするべきであること、そしてこれまでの大衆文芸の低級化は精算されなければならないと明言する(47・10：5)。11月号では、文学は美を求めるものであり、人間をまことの文化に目覚めさせ、人間の間人らしい

生活の土台をつくるものである以上、文化日本の創造の大業に参加するものであることを（47・11：5）、12月号では、小説は面白くなければならず、面白い面白くないか、読者の鑑賞弁別に待つ外ないが、修練しつつ読み鑑賞しつつ読む読者を予想しつつこの雑誌の編集をしていると表現する（47・12：5）。

このように『小説新潮』の「創刊の言葉」は敗戦後の日本社会において、戦後民主化の波にのり大衆を主体に高級な「娯楽」としての雑誌づくりを強く前面に打ち出すものであった。『小説新潮』は「中間雑誌」として戦後日本社会における国民の活字への渴望とがあいまって飛躍的に売り上げをのばし中間小説の主流雑誌としてその地位を作り上げていくこととなる。

II グラビアが語る戦後日本社会

中間雑誌として『小説新潮』は、小説だけではなく巻頭ページはグラビアが必ず掲載され、当時の日本社会を象徴する表象が頁をめくると目に飛び込んでくる現代の週刊誌的な雑誌でもあるといえる。創刊の翌年1948年以降表紙を飾るのは昭和期を代表する洋画家猪熊弦一郎が描いた斬新な絵である。画家の野間仁根は「表紙画がこんなに長い期間、同一画家によって描かれると言うのは、表紙の絵が斬新であり、新鮮な発想、新奇な着想、親身なる構想なる故であろう」¹²と賛辞をよせている。それ以外にも本誌では時代の変遷とともに趣味の頁、読者の声、経済動向、文学、演劇に関するエッセイなど、多岐にわたりその分野における専門家によるものが掲載されるようになる。本章では、主に巻頭ページを飾るグラビアの変遷を分析し戦後日本社会を4つの時期区分に分け考察する。

(1) 第I期：「作家中心主義」（1947～1949年）

「作家中心主義」と題した第I期として時期区分できる1947年から1949年は、グラビアのモデルが職業作家たちでかなり占められる。内容としては、敗戦後の日本社会の断面が作家をモデルとした背景から戦後混乱期を表象することと呼応している。この時期の3年間グラビアに登場するのは、当該号に作品を執筆している作家たちが9割を占める。それ以外のグラビアのモデルとなるのは、かつての文壇の大家と呼ばれた作家の生前の姿、あるいは掲載号に小説の挿絵を描いた画家たちなどである。特徴的な点として、グラビアの撮影場所がモデルである作家たちの仕事場であり、またそれでなければ仕事場以外の自宅の一室での日常の姿、あるいは自宅近所の屋外での普段の生活の一コマがグラビアの中にあられる。室内の撮影風景も、藤原伸爾のように病床に伏せりながら蒲団の上で寝巻のまま執筆している姿が掲載され（49・5：3）、火野葦平の場合では、自宅の部屋らしき畳の上で、鍋を食した後らしく、空っぽになった鍋と大きなスプーン、手にはビールらしきものが入ったコップを持ち寝転がっている姿が掲載されている（49・7：2）。それと対照的なのが、川端康成が、自宅で掛け軸を広げ鑑賞している姿であり（48・5：1）、また三島由紀夫のようにスーツ姿で白馬にまたがり、国際乗馬クラブで撮影されたものもある（49・7：3）。グラビアタイトルは「口絵写真」とシンプルなものであるが、グラビアの中の作家たちの私生活の様子からうかがえるものは、彼らの日常であり、同じ作家でありながら経済状況、生活環境の大きなギャップにこの時期の時代性が表れているといえる。中間雑誌が「純文学

と大衆小説の中間に位置するもの」という定義が、グラビアからも純文学作家と大衆小説作家が同じ数だけ割り振られ、彼らの一部は豊かな生活の様子が掲載され、そうでない作家には、貧困と不健康のなかに、当時の戦後日本社会のどこにでも目にするのできる身近で親しみやすいグラビアが登場する。

(2) 第Ⅱ期：「女性中心主義」(1950～1954年)

『小説新潮』のグラビアは、第Ⅰ期の「作家中心主義」から一転して有名、無名問わず女性が主体となる「女性中心主義」となる時期である。タイトルも内容を直接表現したシンプルなものとなり華やかさが加わったグラビアに変化する。1950年代のグラビアには副題として「現代写真家代表作集」として撮影者の写真家の名前が掲載されることも特徴的である。この年の1月～8月号のなかからいくつか抜粋すると、「青春の顔」(50:1・1～4)、「くろかみ」(50:3・1～4)、「東京の踊り子」(50:4・1～4)、「女体叙情」(50:8・1～4)と、一人ないし二人組の女性たちがテーマに即した内容でグラビアを飾り、女性の肉感的躍動が感じられるものが多い。例えばこの「女体叙情」のグラビアでは、初めて女性のヌードグラビアが登場し、撮影場所も温泉地、森の中、水辺といった開放的な自然の中で撮影されたグラビアである。一方同年の9月～12月号では「日本の建築の美」(50:9・1～4)、「国立公園」(50:10・1～4)、「たそがる、街」(50:11・1～4)では、日本独特の文化、風景が展開され、前期のソフトな雰囲気から保守的な雰囲気に変化する。翌年1951年の1月～12月号では「女流各界ベストフォー」(現文ママ)と題し、放送、洋舞、日舞、演劇、政治など各分野で活躍する4人の女性たちが登場してくる。ここに4人目のモデルとして掲載される各界を代表する女性は、その方面の専門家による推薦された人物である。推薦者の推薦理由の解説付きである事が見せるグラビアから紹介するグラビアへと変化した時期となることが言える。1951年の2月号を例に挙げると、芸能界を代表する女優、原節子、木暮美千代、高峯秀子、山田五十鈴などがグラビアを飾り華やかな雰囲気は、文芸雑誌には見られない華美がある。1952～54年では「故郷の美」と題してシリーズ化され、地元のみならず多くのミスが多く掲載され、推薦者たちの解説文が各ページ下部に掲載される。この推薦者たちは各地方の知事や企業の役員といった権力者であることも特徴的である。グラビアの背景は、地方色が前面に押し出され、まるでお見合い写真のような雰囲気すらあるグラビアとなっている。

(3) 第Ⅲ期：「混在主義」(1955～1957年4月)

第Ⅲ期におけるグラビアは、作家、有名・無名女性が同時にそれぞれのタイトルの下、登場する混合型となるグラビアである。一つが、「作家故郷へ行く」であり、もう一つが「女流人国記」である。さらに、1957年1月～4月号においては、「話題の人たち」と「季節の女性」というタイトルのグラビアが4か月間掲載される。頁数もこれまでの倍の紙幅が割かれ8頁になることも大きな変化である。「作家故郷へ行く」と「女流人国記」のふたつのグラビアの共通点として、「故郷」と「国記」の地域が同一であり、その場所に縁のある人物たちがグラビアの被写体であるところである。異なる点においては、「作家」のグラビアは、ただ一人の作家が4頁にわたり登場するが、「国記」の方は3人の著名人女性と一人の一般人女性が一頁一人の割合で掲載され、それぞれの女性の紹介文が第Ⅱ期の「故郷の美」シリーズと同様なスタイルで載せられている。

る。例に挙げると、1955年3月号では、作家の丹羽文雄が三重県を訪ね、伊勢神宮で佇んでいる様子、彼が8歳の時に得度式を挙げた真宗高田総本山で正座する様や、芭蕉の胸像のある上野市俳聖殿と四日市港や、志摩の真珠養殖場で養殖の作業をしている様子を覗き込むところなどである。さらにグラビアも一頁内における写真が二分割されるなど複数の背景が同時に掲載されるグラビアとなっている。同号での「国記」では、女流作家の森三千代をはじめ、レコード歌手の喜久丸、陸上選手の西田芳子、最後は、三重県出身の丹羽氏が推薦する女性が掲載される。「国記」に掲載される女性たちの紹介文は、モデルである女性自身が直接自分の近況、地元の特徴などを紹介する文章が掲載されるようになることが、第Ⅱ期の「故郷の美」シリーズとは大きく異なる点であるが、4人目の「国記」の紹介文は推薦者が紹介文を書いていることは、第Ⅱ期の「故郷の美」シリーズと同様である。その他にも掲載人物のその中には、有名舞妓、芸者が登場するのも特色である。毎号掲載写真の最終頁の片隅には、「美人写真」として推薦者を一般読者から慕う広告が登場する。実際の推薦者を概観すると、当該地の知事、商工会議所の会頭、作家などの一般読者として著名人が多く推薦しているところが特徴的である。後半の「話題の人たち」では、タイトル通り当時ニュースとなった中心人物である政治家、賞を受賞したスポーツ選手や作家などが短いキャプションとともに掲載される。「季節の女性」ではプロのモデルや一般の女性が登場し、サブタイトルに即したテーマにそった写真が掲載される。

(4) 第Ⅳ期：「多様化主義」(1957・5月～1965年)

『小説新潮』におけるグラビア第Ⅳ期の特徴は、著しい変化として二点挙げられる。第一に、1957年5月号から一気に巻頭グラビアがカラーとなり、タイトルも「カラー・日本百景」とし日本全国の風光明媚な場所が掲載される。このシリーズは、1960年12月号まで続き、合計44地域の景色を掲載することになる。第二に、グラビアの掲載内容が多様化し、タイトルだけでも第Ⅰ～Ⅱ期の1タイトル、第Ⅲ期の2タイトルと比較すると第Ⅳ期は4タイトルに増え、それらは各年継続するもの、新タイトルと入れ替わるものなど、グラビアの掲載内容の変動がみられ、戦後日本社会における高度経済成長の社会変動のめまぐるしい様子と連動してグラビアに投影されている。

「カラー・日本百景」は、前記したように1960年12月号で終了し、1961年からは「日本の美」として1964年12月まで続き日本各地の48地域が掲載され、さらに1965年からは、「カラー世界の日本」として巻頭グラビアを飾る。この三つのグラビアに通底していることは、日本各地の四季折々の自然風景、観光地、文化活動などが主体である事である。例えば、1958年2月号では、巻頭グラビアを飾るのは鹿児島であり、桜島口にての黒神溶岩原、東桜島にて頭上に桶を載せて運んでいる女性、指宿海岸の砂風呂、開聞岳などの風景が掲載される。「日本の美」においては、1961年10月号では、和歌山が舞台として那智大社の火祭り、白浜温泉・円月島の風景などが掲載される。1965年3月号の「世界の日本」では、能楽堂、国宝姫路城が登場するといった内容となっている。

第Ⅲ期に引き続き「話題の人たち」、「季節の女性」「取材紀行」のグラビアもが継続掲載されるがこちらはモノクロのグラビアである。例えば1958年2月号における「話題の人たち」の登場人物は、フランス文学研究者の中島健蔵、第四回小説新潮賞受賞者小田武雄、第五回野間文学

賞受賞者円地文子、阪神タイガース監督就任をした田中義雄などとなり、当時の日本社会でニュースとなった有名人たちばかりである。1957年6月号の「季節の女性」では、芸者がモデルとなり、撮影者木村勝正作として、撮影に使用したレンズ、シャッター秒速など撮影技術の詳細がグラビアの下部に記載されたりもする。続いて「取材紀行」と題したグラビアでは、作家が地方都市を訪ね取材をしている様や、観光に興じる姿などが4頁にわたり掲載される。1958年2月号では、田村泰次郎が栃木、千葉県を訪ねる様子が掲載される。

その他のグラビアとして「新女性群像」(58:1~12)では、女性自衛官、女子医大生、写真短大生など、当時女性の職業として新しい類いであろう人々が彼女たちの職場や学校などを背景に掲載され、「日本の表情」(59:1~12)では、キャプションが付けられ、「国際空港・羽田」(59:1・10)や、「夏の軽井沢」(59:10・10)が掲載されている。「現代の生態」(60:1~12)では、繁華街で泥酔しているビジネスマンの様子、工事現場、当時ブームとなっていた代表的な娯楽であるスキー、釣り、登山へ出かける大勢の人々の移動風景、ワシントンハイツの航空写真、交通渋滞などであり、日本経済が回復し人々の生活が豊かになった社会の表情がグラビアに登場する時期である。

表Ⅱ-1 「グラビアタイトル」 『小説新潮』 創刊号～1957

	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957
1月		口絵写真	口絵写真	「青春の顔」	「女流各界ベストフォー—洋舞—」 〔ヌード四態〕	「故郷の美—京都の巻—」 〔私のひいき〕	「故郷の美—大阪府の巻—」 〔女の顔〕	「故郷の美—東京都の巻—」 〔初姿四態〕	「一九五五年のホー」 〔故郷の美—奈良・熊本巻—〕	「作家故郷へ行く(青森県)石坂洋次郎」 「女流国記(青森県)」 〔夫婦善哉〕	「話題の人たち」 「季節の女性—聖夜—」 「取材紀行(舟橋聖一)」 〔春宵〕
2月		「文壇親交録」	口絵写真	「早春の光」	「女流各界ベストフォー—映画—」	「故郷の美—愛知県の巻—」	「故郷の美—山口県の巻—」	「故郷の美—岩手県の巻—」	「作家故郷へ行く(新潟県)坂口杏吾」 「女流国記」	「作家故郷へ行く(香川県)菱井栄」 「女流国記(香川県)」	「話題の人たち」 「季節の女性—雪国—」 「取材紀行(火野葦平)」
3月		(グラビア)	口絵写真	「くろかみ」	「女流各界ベストフォー—レコード—」	「故郷の美—新潟県の巻—」	「故郷の美—山形県の巻—」	「故郷の美—神奈川県巻—」	「作家故郷へ行く(三重県)丹羽文雄」 「女流国記」	「作家故郷へ行く(和歌山県)大岡昇一」 「女流国記(和歌山県)」	「話題の人たち」 「季節の女性—炉辺—」 「取材紀行(川崎長太郎)」
4月		(グラビア)	口絵写真 〔「女性美四態」〕	「東京の踊り子」	「女流各界ベストフォー—実業—」	「故郷の美—鹿児島県の巻—」	「故郷の美—福岡県の巻—」	「故郷の美—長崎県の巻—」 〔春宵〕	「作家故郷へ行く(静岡県)井上靖」 「女流国記(静岡県)」 〔故郷の美—鳥取・佐賀の巻—〕	「作家故郷へ行く(長崎県)佐田祐子」 「女流国記(長崎県)」 〔楽しきひと時〕	「話題の人たち」 「季節の女性—銀座夜色—」 「取材紀行(中村武志)」 〔各界名コンビ〕
5月		口絵写真	口絵写真	「潮風」	「女流各界ベストフォー—雑誌—」 〔憧しみのひと時〕	「故郷の美—和歌山県の巻—」	「故郷の美—三重県の巻—」 〔我が足跡〕	「故郷の美—茨城県の巻—」	「作家故郷へ行く(岡山県)坪田譲三」 「女流国記(岡山県)」	「作家故郷へ行く(兵庫県)椎名龍三」 「女流国記(兵庫県)」	「カラー・日本百景①—中伊豆—」 「話題の人たち」 「季節の女性—春の海—」 「取材紀行(赤い夕陽・立野信之)」
6月		口絵写真	口絵写真	「夜の街」	「女流各界ベストフォー—新劇—」	「故郷の美—香川県の巻—」	「故郷の美—高知県の巻—」	「故郷の美—岡山県の巻—」	「作家故郷へ行く(長野県)平林たけ子」 「女流国記(長野県)」	「作家故郷へ行く(秋田県)伊藤永之介」 「女流国記(秋田県)」	「カラー・日本百景②—別府—」 「話題の人たち」 「季節の女性—春宵—」 「取材紀行(芝木好子)」
7月		口絵写真	口絵写真	「夏の青春」	「女流各界ベストフォー—放送—」	「故郷の美—大阪府の巻—」	「故郷の美—兵庫県巻—」	「故郷の美—滋賀県の巻—」 〔近況報告〕	「作家故郷へ行く(広島県)井伏鱒二」 「女流国記(広島県)」 〔故郷の美—埼玉・福井の巻—〕	「作家故郷へ行く(千葉県)立野信之」 「女流国記(千葉県)」 〔新女性像〕	「カラー・日本百景③—紀州—」 「話題の人たち」 「季節の女性—スタジオリバー—」 「取材紀行(広津和郎)」 〔新女性像〕
8月		口絵写真	口絵写真	「女性叙情」	「女流各界ベストフォー—声楽—」	「故郷の美—静岡県の巻—」	「故郷の美—青森県の巻—」	「故郷の美—群馬県の巻—」	「作家故郷へ行く(愛知県)尾崎士郎」 「女流国記(愛知県)」	「作家故郷へ行く(富山県)伊藤輝太」 「女流国記(富山県)」	「カラー・日本百景④—阿波—」 「話題の人たち」 「季節の女性—緑陰—」 「取材紀行(松本清張)」
9月	「名家近影」	口絵写真	写真口絵	「日本建築の美」 〔アトリエ巡り〕	「女流各界ベストフォー—新派—」	「故郷の美—秋田県の巻—」 〔作家とモデル〕	「故郷の美—広島県の巻—」	「故郷の美—宮崎・千葉県の巻—」	「作家故郷へ行く(大分県)井上友一郎」 「女流国記(大分県)」	「作家故郷へ行く(高知県)濱本浩」 「女流国記(高知県)」	「カラー・日本百景⑤—岐阜—」 「話題の人たち」 「季節の女性—ロープ習作—」 「取材紀行(内田百閒)」
10月	「無我の境」	口絵写真	写真口絵 〔「新女性美」〕	「国立公園」	「女流各界ベストフォー—政治—」	「故郷の美—宮城県の巻—」	「故郷の美—長野県の巻—」	「故郷の美—栃木・富山県の巻—」 〔近況報告〕	「作家故郷へ行く(大分県)林房雄」 「女流国記(大分県)」 〔夫婦善哉〕	「作家故郷へ行く(石川県)深田久弥」 「女流国記(石川県)」	「カラー・日本百景⑥—千葉—」 「話題の人たち」 「季節の女性—山嶽の乙女—」 「取材紀行(小島誠二郎)」 〔近況報告〕
11月	「作家風土記」	口絵写真	写真口絵	「たそがる×街」	「女流各界ベストフォー—邦楽—」	「故郷の美—徳島県の巻—」	「故郷の美—鳥根県の巻—」	「故郷の美—北海道巻—」	「作家故郷へ行く(北海道)伊藤整」 「女流国記(北海道)」	「作家故郷へ行く(福岡県)梅崎春生」 「女流国記(福岡県)」	「カラー・日本百景⑦—鳥根—」 「話題の人たち」 「季節の女性—ベット—」 「取材紀行(池田みち子)」
12月	「1947年文壇展望」	口絵写真	写真口絵	「同じ道をゆく」	「女流各界ベストフォー—日舞—」	「故郷の美—石川県の巻—」	「故郷の美—福島県の巻—」	「故郷の美—岐阜・山梨の巻—」	「作家故郷へ行く(福島県)中山義秀」 「女流国記(福島県)」	「作家故郷へ行く(福井県)高見順」 「女流国記(福井県)」	「カラー・日本百景⑧—岩手—」 「話題の人たち」 「季節の女性—きもの—」 「取材紀行(阿部知二)」

() 内タイトルは別冊号

表Ⅱ-2 「グラビアタイトル」『小説新潮』1958年～1965年

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965
1月	「カラー・日本百景① 一番川」 「話題の人たち」 「新女性群像 (女子医大)」 「私の抱負」	「カラー・日本百景② 一番森」 「国際空港・羽田 (日本の表情 その一)」 「取材紀行 (丹羽文雄)」 「初対面」 「雪国の女たち」	「カラー・日本百景③ 一京都」 「除け払いニッポン (現代の生感)」 「ある日ある時 (丹羽文雄)」 「私の愛車」	「日本の美①京都」 「課題写真コン クール」 「ある日ある時 (円地文子)」 「世界のホープ」 「日本の美②茨城県」 「新居訪問」	「日本をつくる人 その一 林武」 「作品の跡を訪ねて (『碑』中山義秀)」 「日本の美③茨城県」 「新居訪問」	「日本の美④宮城県」 「作品の跡を訪ねて (『銀中』田宮虎彦＝解説・杉森久英)」 「ある日ある時 (各界トップ・レディー (1))」 「(春近し)」	「日本の美⑤宮崎県」 「グラビア・ルゴ オリン ピックを待て」 「ワイドアング ル日本 (1) 一」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「作品の跡を訪ねて (『犯監』伊藤整＝解説・杉森久英)」	「カラー世界の日本①」 「作家の顔 (1) 川端康成」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「東京モノレール (ワイド・アングル日本 (13))」
2月	「カラー・日本百景④ 一鹿児島」 「話題の人たち」 「新女性群像 (ラジオ・東京テレビ)」 「取材紀行 (田村泰次郎)」	「カラー・日本百景⑤ 一岡山」 「新艇熱海 (日本の表情 その二)」 「取材紀行 (丹羽文雄)」 「初対面」	「カラー・日本百景⑥ 一高知」 「ブーム・ホーモ (現 代の生感)」 「ある日ある時 (今東光)」	「日本の美⑥香川」 「課題写真コン クール」 「ある日ある時 (獅子文六)」 「新大塚 大鶴 (各界のホープ)」	「日本の美⑦大分県」 「作品の跡を訪ねて (『顔』丹羽文雄)」 「日本をつくる人 その二 (三船敏 郎)」	「日本の美⑧山口県」 「作品の跡を訪ねて (『銀座 川』井上友一＝解説・杉 森久英)」 「ペギー・葉山 (各界トッ プ・レディー (2))」	「日本の美⑨北海道 (その 一)」 「夜のなない街」 「ワイドアング ル日本 (2) 一」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「作品の跡を訪ねて (『飯と 汁』川口松太郎＝解説・杉 森久英)」	「カラー世界の日本②」 「作家の顔 (2) 丹羽文雄」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「人間臭い動物たち (ワイ ド・アングル日本 (14))」
3月	「カラー・日本百景⑦ 一茨城」 「話題の人たち」 「新女性群像 (平山レイス工場)」 「取材紀行 (藤原審爾)」	「カラー・日本百景⑧ 一栃木」 「監視庁 (日本の 表情 その三)」 「取材紀行 (阿川弘之)」 「初対面」	「カラー・日本百景⑨ 一熊本」 「日本の胃袋 (現代の 生感)」 「ある日ある時 (石坂洋次郎)」	「日本の美⑩茨城県」	「日本の美⑪大分県」 「作品の跡を訪ねて (『野の蘆標』水上 勲)」 「日本をつくる人 その三 (松下正 寿)」	「日本の美⑫長野県」 「作品の跡を訪ねて (『秋津 温泉』藤原審爾＝解説・杉 森久英)」 「大貫通子 (各界トッ プ・レディー (3))」	「日本の美⑬北海道 (その 二)」 「美人製造の裏側」 「ワイドアング ル日本 (3) 一」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「作品の跡を訪ねて (『花柳』 藤澤恒夫＝解説・杉森久英)」	「カラー世界の日本③」 「作家の顔 (3) 石坂洋次 郎」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「食堂車=この五百五万食 のまごころ (ワイド・アング ル日本 (15))」
4月	「カラー・日本百景⑩ 一山形」 「話題の人たち」 「新女性群像 (東京写真短大)」 「取材紀行 (今日出海)」	「カラー・日本百景⑭ 一大阪」 「スキー・ブーム (日本の表情 その四)」 「取材紀行 (井上靖)」 「初対面」 「(春宵一刻)」	「カラー・日本百景⑫ 一兵庫」 「歌ニッポン (現代 の生感)」 「ある日ある時 (尾崎士郎)」 「特集の人たち」	「日本の美⑫秋田 県」 「課題写真コン クール④」 「ある日ある時 (北原武夫)」 「その四 (阿部真之 介)」	「日本の美⑬新潟県」 「作品の跡を訪ねて (『女坂』円地文子)」 「日本をつくる人 その四 (阿部真之 介)」	「日本の美⑭高知県」 「作品の跡を訪ねて (『たま ゆめ』曾野綾子＝解説・杉 森久英)」 「坂井素子 (アンネ社長＝ 各界トップ・レディー (4))」	「日本の美⑮島根県」 「作品の跡を訪ねて (『日本 の美』ワイドアング ル日本 (4) 一)」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「作品の跡を訪ねて (『瓜』 戸川幸夫＝解説・杉森久英)」	「カラー世界の日本④」 「作家の顔 (4) 今東光」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「孤独な若者たちの社交場 (ワイド・アングル日本 (16))」
5月	「カラー・日本百景⑮ 一愛知」 「話題の人たち」 「新女性群像 (婦人自衛隊)」 「取材紀行 (今東光)」	「カラー・日本百景⑮ 一愛知」 「撮影所 (日本の 表情 その五)」 「取材紀行 (藤田晋雄)」 「初対面」	「カラー・日本百景⑬ 一宮崎」 「日本の中外の国 (現 代の生感)」 「ある日ある時 (佐田昭子)」	「日本の美⑯福岡 県」 「課題写真コン クール⑤」 「ある日ある時 (梅崎春生)」 「各界のホープ」 「徳武定之)」	「日本の美⑰山梨県」 「作品の跡を訪ねて (『大木』獅子文六)」 「日本をつくる人 その五 (丹下健 三)」	「日本の美⑱岡山県」 「作品の跡を訪ねて (『くれ ない』佐田昭子＝解説・杉 森久英)」 「花柳寿輔 (各界トッ プ・レディー (5))」	「日本の美⑲佐賀県」 「警察官」 「ワイドアング ル日本 (6) 一」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「作品の跡を訪ねて (『集 の城』司馬遼太郎＝解説・杉 森久英)」	「カラー世界の日本⑤」 「作家の顔 (5) 平林たい 子」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「国際通信 (ワイド・アング ル日本 (17))」
6月	「カラー・日本百景⑯ 一福岡」 「話題の人たち」 「新女性群像 (モデル・クラブ)」 「取材紀行 (森山啓)」	「カラー・日本百景⑯ 一福岡」 「三番」 「語り子 (日本の 表情 その六)」 「取材紀行 (村松松風)」 「初対面」	「カラー・日本百景⑭ 一福岡」 「歌ニッポン (現代 の生感)」 「ある日ある時 (井上友一)」 「三浦昌郎)」	「日本の美⑱奈良 県」 「課題写真コン クール⑥」 「ある日ある時 (権一雄氏)」 「各界のホープ」 「三浦昌郎)」	「日本の美⑳滋賀県」 「作品の跡を訪ねて (『駅前旅館』井伏鱒 二)」 「日本をつくる人 その六 (瀧川秀 樹)」	「日本の美㉑兵庫県」 「作品の跡を訪ねて (『お さま』今東光＝解説・杉 森久英)」 「岸田今日子 (各界トッ プ・レディー (6))」	「日本の美㉒愛知県」 「九千万の足」 「ワイドアング ル日本 (6) 一」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「作品の跡を訪ねて (『香 車』有吉佐和子＝解説・杉 森久英)」	「カラー世界の日本⑥」 「作家の顔 (6) 舟橋聖一」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「造船 (ワイド・アング ル日本 (18))」
7月	「カラー・日本百景⑳ 一奈良」 「話題の人たち」 「取材紀行 (川口松太郎)」 「チャーム・フォト①」 「私のひいき」	「カラー・日本百景⑲ 一神奈川」 「観光ゲーム (日本の 表情 その七)」 「取材紀行 (戸川幸雄)」 「初対面」 「(同好の人たち)」	「カラー・日本百景⑮ 一群馬」 「東京の25時 (現代 の生感)」 「ある日ある時 (中山義秀)」 「(七人の名探偵)」	「日本の美㉓岐阜 県」 「課題写真コン クール⑦」 「ある日ある時 (芝木好子)」	「日本の美㉔長崎県」 「作品の跡を訪ねて (『如何なる星の下 に』高見順)」 「日本をつくる人 その七 (水野成 夫)」	「日本の美㉕熊本県」 「作品の跡を訪ねて (『武蔵 野野人』大同昇平＝解説・ 杉森久英)」 「森英恵 (各界トッ プ・レ ディー (7))」	「日本の美㉖山形県」 「東京の中の貴族・ホテル」 「ワイドアング ル日本 (7) 一」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「作品の跡を訪ねて (『ある 日の遠景』舟橋聖一＝解説・杉 森久英)」	「カラー世界の日本⑦」 「作家の顔 (7) 川口松太 郎」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「造船 (ワイド・アング ル日本 (19))」
8月	「カラー・日本百景㉑ 一福島」 「話題の人たち」 「取材紀行 (尾崎士郎)」 「チャーム・フォト②」	「カラー・日本百景㉑ 一福島」 「賭け (日本の 表情 その八)」 「取材紀行 (源氏鶏太)」 「初対面」	「カラー・日本百景⑯ 一長野」 「ラッシュ・らっしゅ (現代の生感)」 「ある日ある時 (山本周五郎)」	「日本の美㉕岐阜 県」 「課題写真コン クール⑧」 「ある日ある時 (井上靖氏)」	「日本の美㉕三重県」 「作品の跡を訪ねて (『砂浜の花』平林た い子)」 「日本をつくる人 その八 (田崎勇 三)」	「日本の美㉖神奈川県」 「作品の跡を訪ねて (『伊豆 の踊り子』川端康成＝解 説・杉森久英)」 「松坂千ミ代 (各界トッ プ・レ ディー (8))」	「日本の美㉗石川県」 「闇の当らぬ母子像」 「ワイドアング ル日本 (8) 一」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「作品の跡を訪ねて (『柳生 武藏』五味康太＝解説・杉 森久英)」	「カラー世界の日本⑧」 「作家の顔 (8) 石川達三」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「不景気に強い子役 (ワイ ド・アングル日本 (20))」
9月	「カラー・日本百景㉒ 一滋賀」 「話題の人たち」 「取材紀行 (中山義秀)」 「チャーム・フォト③」	「カラー・日本百景㉒ 一滋賀」 「異郷のある自衛隊 (日 本の 表情 その九)」 「取材紀行 (椎名麟三)」 「初対面」	「カラー・日本百景⑯ 一北海道」 「若者たち (現代の生 感)」 「ある日ある時 (平林たい子)」	「日本の美㉖千葉 県」 「課題写真コン クール⑨」 「ある日ある時 (井伏鱒二)」	「日本の美㉖埼玉県」 「作品の跡を訪ねて (『肉体的田村』田村泰 次郎)」 「日本をつくる人 その九 (川島正次 郎)」	「日本の美㉗福島県」 「作品の跡を訪ねて (『人生 劇場』尾崎士郎＝解説・杉 森久英)」 「横山秀子 (各界トッ プ・レ ディー (9))」	「日本の美㉘徳島県」 「一億四千万」 「ワイドアング ル日本 (9) 一」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「作品の跡を訪ねて (『光 る海』石坂洋次郎＝解説・杉 森久英)」	「カラー世界の日本⑨」 「作家の顔 (9) 山本周五 郎」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「築地魚市場 (ワイド・ア ングル日本 (21))」
10月	「カラー・日本百景㉓ 一広島」 「話題の人たち」 「取材紀行 (加賀淳子)」 「チャーム・フォト④」 「(美りの秋)」	「カラー・日本百景㉓ 一広島」 「夏の軽井沢 (日本の 表情 その十)」 「取材紀行 (中里恒子)」 「初対面」 「(秋のおんな)」	「カラー・日本百景⑯ 一北海道」 「お祭りニッポン (現 代の生感)」 「ある日ある時 (源氏鶏太)」	「日本の美㉗和歌 山県」 「課題写真コン クール⑩」 「ある日ある時 (大岡昇平)」	「日本の美㉗三重県」 「作品の跡を訪ねて (『砂浜の花』平林た い子)」 「日本をつくる人 その十 (川端康 成)」	「日本の美㉘鹿児島県」 「作品の跡を訪ねて (『定年 退職』瀧氏雄太＝解説・杉 森久英)」 「田中聡子 (各界トッ プ・レ ディー (10))」	「日本の美㉙福井県」 「治水不在」 「政治不在」 「ワイドアング ル日本 (10) 一」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「作品の跡を訪ねて (『象 牙の穴』黒岩重吾＝解説・杉 森久英)」	「カラー世界の日本⑩」 「作家の顔 (10) 井上靖」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「プロ野球の私説応援団 (ワイド・アングル日本 (22))」
11月	「カラー・日本百景㉔ 一新潟」 「話題の人たち」 「取材紀行 (由起しげ子)」 「チャーム・フォト⑤」	「カラー・日本百景㉔ 一山口」 「(後編) (日本の 表情 11)」 「取材紀行 (有吉佐和子) 広島」 「初対面」	「カラー・日本百景⑯ 一北海道」 「無敵夢中 (現代の生 感)」 「ある日ある時 (高見順氏)」	「日本の美㉘青森 県」 「課題写真コン クール⑪」 「ある日ある時 (藤原審爾)」	「日本の美㉘富山県」 「作品の跡を訪ねて (『太閤の季節』石原 慎太郎)」 「日本をつくる人 その十一 (河野一 郎)」	「日本の美㉙徳島県」 「作品の跡を訪ねて (『虚空 遍路』山本周五郎＝解説・ 杉森久英)」 「渡辺英児 (各界トッ プ・レ ディー (11))」	「日本の美㉚東京 (その 1))」 「『情報』ジャーナル」 「ワイドアング ル日本 (11) 一」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「作品の跡を訪ねて (『天使 の季節』中里恒子＝解説・杉 森久英)」	「カラー世界の日本⑪」 「作家の顔 (11) 中山義 秀」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「海軍のふるさと (ワイド・ア ングル日本 (23))」
12月	「カラー・日本百景㉕ 一鳥取」 「話題の人たち」 「取材紀行 (井上友一)」 「チャーム・フォト⑥」	「カラー・日本百景㉕ 一宮城」 「旅役者 (日本の 表情 12)」 「取材紀行 (高見順)」 「初対面」	「カラー・日本百景⑯ 一北海道」 「かなわぬ時の… (現代の生感)」 「ある日ある時 (曾野綾子)」	「日本の美㉙広島 県」 「課題写真コン クール⑫」 「ある日ある時 (舟橋聖一)」	「日本の美㉙群馬県」 「作品の跡を訪ねて (『ぼんち』山崎豊 子)」 「日本をつくる人 その十二 (本多宗 一郎)」	「日本の美㉚大阪府」 「作品の跡を訪ねて (『まほ ろしの記』尾崎一雄＝解 説・杉森久英)」 「杉野河原義 (各界トッ プ・レ ディー (12))」	「日本の美㉚東京都 (その 2))」 「『金』をつくる表情」 「ワイドアング ル日本 (12) 一」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「作品の跡を訪ねて (『淀 の日記』井上靖＝解説・杉 森久英)」	「カラー世界の日本⑫」 「作家の顔 (12) 円地文 子」 「同じ釜の飯一お久し振り」 「水上生活者 (ワイド・ア ングル日本 (24))」

() 内タイトルは別冊号

Ⅲ グラビアの時期区分と連携する小説作品

これまで、『小説新潮』におけるグラビアを中心に戦後日本社会の時期区分を試みたが、本章では、グラビアの時期区分を基調に、掲載小説作品からの戦後日本社会の時期区分の概観を試みる。この時期区分は、小説作品を軸として時期区分すると、また違った戦後日本社会の諸相が考察できることになると思われるが、本稿の主題が、『小説新潮』におけるグラビア中心の時期区分考察となるので本稿のⅡ章で行った分析と連携する内容の小説作品の紹介をする。

(1) 第Ⅰ期：「作家中心主義」(1947～1949年)

第Ⅰ期の小説作品の主人公たちは、復員兵、未亡人、旧華族、娼婦などと敗戦後色の強い作品が多く登場する。「創刊の言葉」には「大家から無名の新人まで…」とあるが、無名の新人が登場するのは、1948年1月号以降であり9割はすでに名の知れた純文学作家や大衆文学作家である。中間小説の代表的作品と称される石坂洋次郎「石中先生行状記」(48・1 - 49・5, 全18回)、舟橋聖一「雪夫人絵図」(48・1 - 12, 全12回)などの連載小説が始まり、両作品とも年代の枠をこえて第二部、第三部と継続的に掲載され、『小説新潮』の代表的作品として広く認知され、この作品をきっかけに中間雑誌『小説新潮』の地位はゆるぎないものとなる。石坂洋次郎「石中先生行状記」は作家自身の青森での疎開生活が描かれた作品であり、舟橋聖一「雪夫人絵図」では、没落華族の夫婦愛憎小説である。

(2) 第Ⅱ期：「女性中心主義」(1950～1954年)

第Ⅱ期のグラビアの特徴は、有名・無名の女性たちが登場し「女性中心主義」と題したたわけだが、小説作品においてもジェンダーの逆転を描いたものや、仕事とアルバイトそして恋愛・結婚を両立させる女性が主人公となった小説が登場する。この時期を象徴する代表的作品に、池田みち子「泥沼」(50・1:112～121)、井上友一郎「バイト・ダンス」(54:1・268～282)などを挙げることができる。前者の作品では無職となった同棲相手を経済的に自立した女性が養っていく小説であり、後者は、貿易会社の女性秘書が主人公として登場し社会的規範に反し、仕事とアルバイト、恋愛・結婚の全てを両立する物語である。

(3) 第Ⅲ期：「混在主義」(1955～1957年4月)

第Ⅲ期のグラビアの時期区分は「混在主義」と題したが、小説におけるこの時期の特徴として、敗戦を引きずる作品、妻が夫に暴力をふるう作品、時代小説、探偵小説と作品のテーマが混在する時期である。梅崎春生「風化の道」(55:1・232～249)では復員兵の友人が空き巣強盗になり、八年の実刑を受ける物語であり、平林たい子「男のような女」(56:1・228～234)では体育教師の妻が夫の浮気に激昂して暴力をふるい、山本周五郎「深川安楽亭」(57:1・200～230)では江戸時代を舞台に、酒場に集う人びとが描かれ、松本清張「金庫」(57:1・258～273)では、詐欺事件の使途不明金を探し出す探偵小説などが掲載されるなど、作品のジャンルが多岐にわたり登場する。また大佛次郎「冬の木々」(56:3～9, 全6回)では主人公は新劇の女優の卵であるが、彼女がデートで出かけた横浜港にフランスから寄港している客船が登場

し、その中にあるプールで主人公が泳ぐシーンが登場する。戦後民主化の中で、個人の自由が尊重され、自由奔放に振舞って生きることのできる若い女性が描かれている。

(4) 第Ⅳ期：「多様化主義」（1957・5月～1965年）

グラビアによる時期区分において第Ⅳ期は、「多様化主義」と題して、戦後日本社会の高度経済成長を象徴するグラビアが登場する時期である。小説においても同様な傾向を持つ作品を数多く抽出することができる。小説の舞台となるのは江戸時代、敗戦直後、現代と多岐にわたる。目立つ傾向として第Ⅲ期よりもさらに多くの時代小説と推理小説が掲載されるようになり、時代小説は、1958年10月号から特集が年に一度の割合で生まれ、中には剣豪小説と題する特集も1963年4月号で4作品掲載されたりもする。ついで推理小説の特集が1960年5月号に掲載されるなどこれまでにない「特集」として同じジャンルの小説が多数同時に掲載されるようになった時期でもある。さらに小説以外の読物として「ルポルタージュ」が登場し現実社会で起こっている現象を報告するものが1964年1月号から掲載されるようになったことも第Ⅳ期における掲載作品の特徴といえる。

IV 結びに代えて

本稿では、「中間雑誌」『小説新潮』から戦後日本社会の時期区分をグラビアにより考察を行った。四つの時期に分かれる戦後の時期区分を、第Ⅰ期（1947～1949年）を「作家中心主義」と題し、グラビアにおける主体が9割は作家のものであることが証明できた。さらにその内容も純文学作家と大衆小説作家のそれぞれ登場し、このことは「中間雑誌」的要素がグラビアにも反映されていることが分かった。第Ⅱ期（1950～1954年）を「女性中心主義」と名づけグラビアの主体が第一期とは一転し、有名・無名を問わず多くの女性が起用されるようになった時期であることが分かった。各分野における突出した有名女性や、プロフェッショナルなモデルによる生命力あふれる健康的で女性的なポーズは、文芸雑誌には見られない華美な印象を与え「中間雑誌」の週刊誌の側面が醸し出されるグラビアとなっていた。第Ⅲ期（1955～1957年4月）を「混在主義」と題し、第Ⅰ期と第Ⅱ期のグラビアの主体が両方掲載される時期であったことが証明できた。作家と女性（プロフェッショナルなモデルから一般人まで）が同等に登場し、各地方を背景にそれに関係のある人物が登場する時期であり、グラビアの下部には紹介文、解説文なども掲載され見せるグラビアから、紹介するグラビアへと変化した時期でもあった。最後の第Ⅳ期（1957・5月～1965年）を「多様化主義」と呼び、グラビアの主体がこれまでの第Ⅰ～Ⅲ期を総合したものに加え、グラビアのタイトル数も4種類になり、前年のタイトルが継続されるもの、或いは、入れ替えられて新しいタイトルで登場するなど、多様化する時期である事が分かった。第Ⅳ期の重大な特徴として、巻頭グラビアがカラーページで掲載され始めたことである。このことから、戦後日本社会が敗戦から高度経済成長を経験する過程が読み取れるものであった。

Ⅲ章においては、グラビアの時期区分を基調としてそれと連動する小説の抽出を試みた。掲載作品は、グラビアの時期区分をテーマに、それに連動する作品群が、各期に掲載され、グラビアにおける時期区分も小説にも呼応することが証明できた。

本稿では中間雑誌『小説新潮』を歴史史料として、そこに主に巻頭ページに掲載されるグラビアを中心に、戦後日本社会の時期区分の分析を試みた。このことから戦後日本社会を象徴するグラビアが時代と連動し掲載されていることが証明でき、「中間雑誌」『小説新潮』の戦後日本史資料として、戦後日本社会の国民の「欲望」の一端が表象されていることも同時に証明できることとなった。小説作品群の抽出も同様であるが、「中間雑誌」『小説新潮』には、グラビア、小説以外にも趣味の頁、経済動向、俳句、短歌、随筆、漫画、読者の声など様々な誌面で構成がなされているが、これらの考察は今後の課題としていきたい。

付記 本稿は、2013年度日本女子大学大学院生特別研究奨励金の研究成果の一部である。

* 『小説新潮』19**年××月号○○頁掲載記事は、(**・××:○○)として文中に注記した。

* 本資料における旧漢字は本文において新漢字に改めて記入した。

<註>

- 1 『オール讀物』（文藝春秋社）は創刊号は1931年2月創刊である。
- 2 加藤は第一期（1945～50年）を「高級文化」、第二期（1950～54年）「大衆文化」に分ける。
- 3 中村光夫『文學の回帰』（筑摩書房、1959年）169～181頁。
- 4 中間雑誌の御三家として『小説新潮』いがいに認識されているものに『オール讀物』（文藝春秋社、1931年創刊）、『小説現代』（講談社、1963年創刊）がある。
- 5 「出版関係業界展望」（協同出版社、復刊版、1948年）45頁。
- 6 荘司徳太郎、清水文吉編著「経済危機と労働攻勢下の出版販売界」『資料年表日配時代史』（東京出版ニュース社、1980年）71頁。
- 7 『出版データブック改訂版1945～2000』（出版ニュース社、2002年）8頁。
- 8 前掲、44頁。
- 9 ただし『読者世論調査30年—戦後日本の心の軌跡—』による調査対象期間は1949年からであり、1965年までの17年間の平均順位である。
- 10 「いつも読む月刊誌」『読者世論調査30年—戦後日本の心の軌跡—』（毎日新聞社、昭和52年）87頁。なおこの統計は、「あなたはいつも、どんな月刊雑誌を読んでいますか？」（季刊誌、隔月刊誌を含む）という質問に対して回答された30年間の通算結果である。
- 11 尾崎秀樹・宗武朝子「中間小説からエンターテイメントへ」『雑誌の時代—その興亡のドラマ—』（主婦の友社、1979年）67頁。
- 12 『新潮社100年』（新潮社、2004年）148頁。

【参考文献】

- 江藤淳『閉ざされた言語空間 占領軍の検閲と戦後日本』（文藝春秋、1989年）
大村彦次郎『文壇うたかた物語』（筑摩書房、1995年）
尾崎秀樹『大衆文学論』（勁草書房、1965年）
尾崎秀樹・宗武朝子『雑誌の時代—その興亡のドラマ—』（主婦の友社、1979年）
加藤秀俊『中間文化』（平凡社、1957年）
神谷忠孝、木村一信編『南方徴用作家—戦争と文学—』（世界思想社、1996年）
川村湊『戦後文学を問う』（岩波書店、1995年）

- 佐藤春夫『戦争 X 文学 18 帝国日本と台湾・南方』（集英社，2012年）
『時代別日本文学史事典 現代篇』（東京堂出版，1997年）
『新潮社100年図書総目録』（新潮社，2005年）
『新潮日本文学辞典』（新潮社，1988年）
『増補大衆文学事典』真鍋元之編，（青蛙房，昭和55年，第3版）
『読書世論調査30年—戦後日本人の心の軌跡—』（毎日新聞社，1977年）
中村光夫「中間小説論」『文學の回帰』（筑摩書房，1959年）169 - 181頁
前掲，『風俗小説論』（講談社，2011年，初版新潮文庫，1969年）
前田愛『近代読者の成立』（岩波書店，1993年）
『増補大衆文学事典』真鍋元之編（青蛙房，1975年，第3版）
『戦後日本スタディーズ①—40・50年代』岩崎稔，上野千鶴子，北田暁大，小森陽一，
成田龍一編著（紀伊国屋書店，2009年）
長谷川泉編『現代文学研究』（至文堂，1987年）
福島鑄朗『雑誌で見る戦後史』（大月書店，1987年）
文春新書編集部編『昭和二十年の「文芸春秋」』（文芸春秋，2008年）
村松剛「中間小説論」『文学界』（日本近代文学館編，1954年，166～172頁）
山岡明著『カストリ雑誌にみる戦後史』（オリオン出版，1970年）
山本明著『カストリ雑誌研究—シンボルにみる風俗史—』（中央公論社，1987年）
吉田則昭・岡田章子『雑誌メディアの文化史』（森話社，2012年）